

# 第八章

## 沖永良部語

## まえがき

沖永良部語の性格・特色は、或程度とらえることができる。しかし語彙となると、他集落との交流の少ない古代からの言語ゆえに、各集落民の特質により、わずかながら相違点がある。ましてアクセントとなると、各集落それぞれに特色を有する。

しかも、言葉というものは、時とともに間断なく変わっていく。沖永良部語もまたその例外ではない。

そこで最初に和泊町出身の研究者永吉毅氏の「沖永良部語の研究」(第一節〜三節)を述べ、同じく町出身の国語研究者安藤佳翠氏の、昭和九年発刊「南島方言えらぶ語の研究」(第四節)を紹介する。したがって、場所または時により、語彙欄で疑わしい点があるろうと思うが、やむを得なかった。

## 第一節 沖永良部語の特色

日本語と南島語(奄美・琉球)とは、今から二五〇〇年〜一七〇〇年前、弥生時代から古墳時代のころ分離した。(服部四郎博士説)

### 一 共通語と同じ方言単語がある

- (1) 身体に関する語……耳・鼻・口・首・血・あくび
- (2) 動物に関する語……牛・犬・アヒル・蜂
- (3) 植物に関する語……花・西瓜・柿・りんご
- (4) 自然に関する語……山・浜・道・石・田・橋
- (5) 生活に関する語……服・帽子・靴・学校・雑誌・

字・墨・畳・障子・皿・茶・  
箸・ふた・味・炭・鉢・枕・  
時計・鉢・車・棒・墓・旅・  
鍵・焼き・蚊帳・暮らし

鎌↓はま 刀↓はたな



〔例〕 u↑o 鬼↓うに 後↓あトウ 面↓うむテイ  
 i↑E 上↓うい 手↓テイ 目↓みい

南島語が本来ア・イ・ウの三母音によって構成されていることは、多くの学者が認めるところである。だから、エ・オの短音からなる音節を含むものは、これを三母音に復原してみることによって、その本義を知ることができると。

三 子音の交代。P音↓F音⇄H音⇄K音

P音……七世紀前  
 F音……七世紀(推古天皇)  
 H音……十五・六世紀頃(室町時代末期)

〔例〕 葉↓ふあ 羽↓ふあに

る。これが口蓋化である。ウキヤ↓ウチャ・イキヤよ↓いチャよ・ムギ↓ムヂなどの例であるが、語頭にあることとはなく、多く「ア・イ・ウ」の下につく場合が多い。知名の方では口蓋化せず、和泊の方で口蓋化している。口蓋化現象は各地にあるようだ。おもしろ時代すでに口蓋化がおこっていたといわれている。

七 格助詞の「ヲ」の省略

「ヲ」抜けことは  
 「例」本を持ってこい↓本持ちふー

八 古語の訛音

- (1) 今日けふは・お早はやよう・今晚こんぱんは……区別なく「ヲウがみやぶら」＝「拜はみ侍はら」の訛なまったもの。
- (2) ろらつしやい……「めんしょうり」＝「参まり候さうらへ」。おはいりなきい……「入いんしょうり」＝「入いりみ候さうらへ」の訛なまったもの。
- (3) たべて下さい……「おごしり」＝「召めし上うがいみ候さうらへ」の訛なまったもの。
- (4) 有あ難がたう……「みへデイろ」＝「三み拜へデイ侍はる」。

四 語中・語尾の「リ」RiはRRUOの後では原則としてRが脱落して「イ」となる。

〔例〕 百合↓ゆい 鳥↓トウい 葉↓くすい  
 まり↓まい 泊とり↓泊とい 西い↓い  
 上あり↓あがい 下さり↓さがい

○ 変らないものもある。  
 うり あり 呉いりり

○ 「レ」が「リ」に変わったもの。  
 彼あれあり 是これふり 切きれ↓きり

五 「M」と「N」の交代

M↓N 〔例〕 鏡かがみ↓はがに 海うみうに  
 N↓M 〔例〕 新にもの↓みむん 似にる↓みちゅん

六 口蓋化

「キ」「ギ」の口蓋化かほとんどである。K音は口頭破裂音で発音部位は軟口蓋であるが、これを硬口蓋で発音するとT音になる。つまり「キ」音が「チ」音に転ず

- 沖縄では「二に拜へドウ侍らる」という。
- (5) 魚を買かって下さい……「魚いちうほいんしょうり」＝「魚いちうほいみ候さうらへ」の訛なまったもの。
- (6) そうではございません……「あやぶらん」＝「有あり侍らむ」の訛なまったもの。